大学生における葬儀体験の構造 (1)

— 葬儀体験尺度作成を通して —

○川端康尋¹・谷井淳一²

(¹ダイヤル・サービス株式会社・²ルーテル学院大学)

キーワード: 葬儀, 葬儀体験尺度

Structure of funeral experience among college students

: Using the funeral experience scale

Yasuhiro KAWABATA¹, Junichi TANII²

(¹Dial Service, ²Japan Lutheran College)

Key Words: funeral, funeral experience scale

目 的

死者儀礼の歴史は長く、葬儀が現在まで執り行われてきた背景には、単に遺体を処理するためだけではないとされている(藤井, 1998)。葬儀には様々な機能的側面があるといわれ、遺体の処理, 社会的処理, 文化的・宗教的処理, 悲嘆の処理, 感情の処理, そして死に対する教育的機能が挙げられている(碑文谷, 2006, pp. 56–65)。こうした機能があるとされているにもかかわらず、葬儀に出席・参列する者が葬儀を体験することによってどのような影響を受けているのか、実証的に把握する研究は見受けられない。本研究では、葬儀体験を「死者のことを改めて知り、死者との関係や死者を取り巻く周囲の人との関係を再認識し、悲しみを和らげ、死について学ぶ機会となる宗教的儀礼体験」と概念的に定義し、葬儀体験尺度の作成及び、大学生の葬儀体験の構造の把握、葬儀の機能について探索的に検討することを目的とした。

方 法

予備調査 葬儀社に従事する職員への聞き取りや、心理学を専門とする教員1名、心理学を専攻している大学院生4名との項目精選から、8つの下位概念、すなわち「死生観の深化」、「悲嘆」、「故人への思慕」、「集いの場」、「非日常的場面」、「宗教的儀式」、「喪失受容」、「故人のことを知る機会」を設定した。下位概念ごとに、4から6程度の項目を検討し、合計40項目からなる葬儀体験尺度調査票を作成した。調査対象 A大学, B大学, C大学の学生に調査質問紙を配布し、423人のデータを回収した(A大学47人, B大学251人, C大学125人)。回収された質問紙の中で、研究に同意し、青年期にあたる18～30歳までの372名(男性111名, 女性261名)を分析対象とした。回答形式は、「きわめてそう思う」を5点、「かなりそう思う」を4点、「わりとそう思う」を3点、「少しそう思う」を2点、「当てはまらない」を1点の5件法で求めた。

結 果

調査質問紙の回答結果を得点化して因子分析(主因子法, バリマックス回転)を行い、因子負荷量が小さい4項目を削除した。残り36項目に対して、改めて因子分析(主因子法, プロマックス回転)を行ったところ、解釈可能な5因子が抽出された。第1因子に負荷量の高い項目は、故人のことを振り返る項目と解釈し、「故人についての振り返り」因子と命名した。第2因子に負荷量の高い項目は、亡くなった方の死後を思い、悲しみを低減させる儀式と解釈し、「悲哀軽減の儀式」因子と命名した。第3因子に負荷量の高い項目は、亡くなったことを否定したい意識と戸惑いを表していると解釈し、「死別への戸惑い」と命名した。第4因子に負荷量の高い項目は、普段の生活にはない場面を表していると解釈し、「非日常的体験」と命名した。第5因子に負荷量の高い項目は、死そのもの

表1 葬儀体験尺度の因子分析結果(主因子法・プロマックス回転)

	F1	F2	F3	F4	F5
(第1因子: 故人についての振り返り $\alpha = 0.91$)					
(3) 亡くなった方との思い出を振り返ることができた。	.82	-.12	.06	-.25	.03
(19) 亡くなった方との絆を再認識する場となった。	.74	.05	.03	-.15	.02
(4) 亡くなった方とのことについて、周囲の人と話し合う場であった。	.72	-.10	-.11	.03	-.06
(23) 亡くなった方の人柄を再認識する機会であった。	.71	-.10	-.07	.06	.06
(37) 亡くなった方へ、想いを伝えることができた。	.71	.18	.03	-.14	-.11
(26) 亡くなった方に対する想いを心に留めることができた。	.69	-.02	.02	.01	.06
(40) 親しい人と悲しみを分かち合うことができた。	.66	.07	.10	.14	-.10
(33) 亡くなった方を尊いと感じた。	.64	-.13	.15	.05	.01
(30) 亡くなった方から受けた思恵を感じる場となった。	.64	.05	.06	-.04	.00
(16) 弔辞を聞いて亡くなった方のことを振り返る機会となった。	.59	-.07	-.08	.16	.01
(22) 亡くなった方の霊魂を慰める場となった。	.43	.10	-.04	.05	.10
(36) 供花や周囲の状況で、亡くなった方との知る機会となった。	.43	.03	-.07	.36	.07
(21) 周囲の人たちとの関係性を再認識する機会であった。	.37	.11	-.03	.30	.11
(39) 生きることを前向きにとらえる機会になった。	.36	.14	.00	.00	.21
(35) 悲しみを表現できる場であった。	.32	.17	.22	.06	-.02
(第2因子: 悲哀軽減の儀式 $\alpha = 0.69$)					
(7) 悲しみを忘れるための儀式であると思った。	-.08	.77	.03	-.12	-.05
(28) 亡くなった方が生まれ変わるための儀式であると思った。	.07	.65	.15	-.20	.09
(15) 悲しみを癒す場として機能していると思った。	.05	.65	-.11	.02	.04
(27) 周囲の人たちが悲しんでいるのを見てほっとした。	.01	.45	.23	.11	-.08
(6) 一つの区切りになる儀式であると思った。	.07	.38	-.22	-.01	.25
(第3因子: 死別への戸惑い $\alpha = 0.76$)					
(25) 亡くなった方が生き返ってほしいと思った。	.35	-.11	.58	-.04	-.05
(32) 火葬することに抵抗があった。	.01	-.10	.57	.15	-.07
(31) 死への不安が増した。	-.18	.01	.65	.07	.42
(38) 取り残されたような怒りを感じた。	-.07	.36	.60	.01	-.12
(2) 亡くなったことを否定したかった。	.42	-.08	.49	-.16	.03
(20) いつもと違う自分の感情の動きに戸惑った。	.22	-.02	.40	.27	.01
(34) 周囲の人たちが悲しんでいて戸惑った。	-.27	.23	.34	.24	.07
(第4因子: 非日常的体験 $\alpha = 0.65$)					
(13) 慣れない儀式に緊張した。	-.07	-.14	.13	.73	.03
(5) 普段見慣れない場で不思議だった。	-.19	-.12	.20	.60	.04
(12) 普段会うことのない人と会うことのできる機会であった。	.26	.03	-.08	.49	-.13
(18) 弔辞を聞いて亡くなった方との知る機会となった。	.27	.26	-.09	.32	.08
(14) 慣習的な儀式であると思った。	-.09	.23	-.07	.30	.05
(第5因子: 死に対する意識の喚起 $\alpha = 0.75$)					
(17) 自分の死をイメージする機会となった。	-.13	.09	.03	.03	.69
(24) 死に対して関心が増した。	.06	.02	-.06	.03	.65
(1) 死が身近にあることを実感した。	.24	-.11	.05	-.07	.54
(9) 死に対して学ぶことがあった。	.28	.01	-.05	-.01	.50
因子寄与	8.77	4.99	3.87	4.72	5.39
因子間相関					
F1	.41	.40	.43	.53	
F2		.16	.61	.45	
F3			.13	.36	
F4				.43	

のへの興味・関心や、死から受ける享受としてのイメージと解釈し、「死に対する意識の喚起」因子と命名した。5因子の累積寄与率は42.47%であった。

考 察

葬儀体験尺度の因子分析の結果、5因子、36項目から成る尺度が作成された。葬儀体験尺度の5つの下位因子から、葬儀がただ単に死者を弔う儀礼ではないことが示された。青年期大学生の葬儀体験の構造を計量的に明示することで、葬儀の機能について一部実証的に把握できたものと推察された。

引用文献

藤井正雄 (1998). 現代人の死生観—葬儀習俗を中心として—宗務時報, 101, 1–27.